

# 「SASA2013（第62次福井県学力調査）」の 課題を克服する授業改善

## －研究協力校における実践と検証－

### 調査研究部 学力調査分析ユニット

三谷和範 浦井加容子 黒川 一  
河合正孝 和多田貴宇 中村宜裕

SASA2013報告書に掲載した福井県の児童・生徒が抱える課題を克服するための指導事例について、研究協力校において実践し、その効果について検証を行う。検証結果をもとに、より効果のある指導事例について考察し、授業改善、教師の力量向上を図る。

〈キーワード〉 SASA2013、課題克服、授業改善、力量向上、指導観、児童・生徒の実態

## I はじめに

福井県学力調査（通称「SASA」Student Academic Skills Assessment）は、昭和26年から毎年、実施され、今年度で第63次を迎える。その目的は、福井県の小・中学校の児童・生徒の課題となる学習内容を的確に洗い出し、課題克服のために有効な指導事例を発信（SASA報告書）することで、授業改善を促進することにある。加えて、その効果検証を適切に行うことで、指導法の見直しや新しい問題作成、教師の力量向上に反映することができる。このような学力向上に向けた検証・改善サイクルを構築することを大きなねらいとする。

## II 実践及び検証内容

研究協力校における授業実践の流れは以下の通りである。

- ① 研究協力校及び授業者の選定（小学校4教科、中学校5教科、各1校ずつ）
- ② 授業者との打合せ（実践事例の内容の検討）
- ③ 打合せを受けての指導案、教材（ワークシート等）等の作成
- ④ 授業実践
- ⑤ 授業者との研究会、児童・生徒への事後アンケート、課題が見られた問題の再調査

次に検証した指導事例の一覧を挙げる。

校種・教科	観点	番号	内容
小学校国語	書くこと	B二	複数の資料を結び付けて自分の考えをもち、中心を明確にし、事例を挙げて書く
小学校社会	社会的事象についての知識・理解	5 (1)	場所や条件に当てはまる町を指摘する
小学校算数	数量や図形についての技能	A2	異分母分数を通分し、□に合う数を求める
小学校理科	科学的な思考・表現	8	空気を温めると体積が膨張することから、ガラス管内のゼリーの動きを推察する
中学校国語	伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項	A二 (二)	文の成分の照応を理解し、指摘する
	書く能力・伝統的な言語文化	B二	伝えたいことや事実について、自分の考えや気持

	と国語の特質に関する事項	(三)	ちを根拠を明確にして書く
中学校社会	資料活用の技能	1	地図をもとに、東京・ロンドン間の最短経路を指摘する
中学校数学	数量や図形などについての知識・理解	A 4	文字を用いて数量の関係を表したときの正しい式を指摘する
中学校理科	科学的な思考	2 (2)	質量パーセント濃度の計算を行い、食塩水500gにとけている食塩の値を求める
	自然事象についての知識・理解	6 (2)	音の高さは振動数によって変わることを指摘する
中学校英語	外国語の理解の能力	5	英語の対話文を読み、資料と関連づけながら登場人物の旅行の順序を正しく読み取る

実施した実践の中から、以下にその一例を示す。なお、検証した各教科の事例は教育研究所のホームページに掲載する。

### 1 誤答分析だけでは分からない児童の思考に対応して柔軟に指導を改善した実践例 ～小学校理科～

#### (1) 課題が見られた問題とその分析

##### 課題が見られた問題 8 (1)

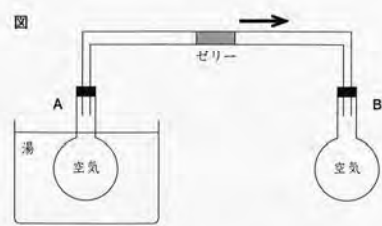
空気を温めると体積が膨張することから、ガラス管内のゼリーの動きを推察する

##### 【科学的な思考】

##### 結果及び誤答分析

正答は**1**で、正答率は42.4%であった。空気が温められたときに起こりえない事象である**2**、**3**を選んだ児童はそれぞれ、3.2%、14.4%と少なかった。一方、**4**を選んだ児童は、39.8%にも及んだ。温められた空気が上昇することは、身近な事象であり、理科においても4年生で学習するが、この知識をそのまま当てはめてしまったと考えられる。

8 次の図のような装置をつくり、ガラス管の中のゼリーが動くようすを観察しました。下の各問いに答えましょう。



(1) Aのフラスコを湯の中に入れたと、ゼリーは右に移動しました。その理由を、次の1～4の中から1つ選び、番号を書きましょう。

- 1 Aのフラスコ内の空気のかさ（体積）がふえたから。
- 2 Aのフラスコ内の空気が重くなったから。
- 3 Aのフラスコがちぢんで、中の空気を押し出したから。
- 4 Aのフラスコ内の空気が温められて、全部上に移動したから。

#### (2) 授業改善に向けて

「物の体積と温度」の単元で、空気を温めると膨張することを学習しても、その後「物のあたたまり方」の単元で空気の対流（温められた空気が上昇することで起こる現象）を学習すると、両者が混同されやすいため、学習内容を整理してそれぞれの違いをしっかりと理解させ、定着を図ることが重要である。

まず、導入の実験では、実験の結果を基に温められた空気の様子について話し合い、空気が上に動くだけでなく下や横にも動くのか膨らむのか、予想を立てて実験で確かめることが大切である。また、空気の変化を図で表現させることにより、児童の現象に対する理解を、より確実なものとする。

さらに、空気の対流を学習後、「物のせいしつとすがたについてまとめよう」において、空気の変化によって起こる現象が、膨張によるのか対流によるのかを考えさせる場面を設定する。

(3) 実践

**提案した指導事例** 「温められた空気の変化を実験を通して理解し、図などで表現する活動」

<学 年> 小学校4年生

<教 材> 「物の体積と温度」（東京書籍4年7時間配当）

「物のせいしつとすがたについてまとめよう」（東京書籍4年 1時間配当）

**実践記録** 研究協力校 小学校4年（12名）

<指導の全体像>

第1次 「物の体積と温度」

第1時 ① 閉じ込められた空気を温めたときの変化を予想し、発表する。

② 実験を行い、空気を温めたときの変化を観察する。

③ 実験の結果から、空気が温められるとどうなるのかを考える。

第2時 ① 前時の実験結果を発表する

② なぜ①のような結果になったのか、空気の様子を図と言葉を使って話し合う。

③ 温められた空気がどうなるから変化が起こるのかを、容器の向きを変えるなどの工夫をして実験で確かめる。

④ 空気は温められると膨張することを確認する。

※本時参照

第3時 ① 温められた空気の様子を、図を用いて発表する。

② 冷やすとどうなるかを予想する。

③ 実験を行い、空気を温めたとき、冷やしたときの体積の変化をまとめる。

第4～7時 省略

第2次 「物のせいしつとすがたについてまとめよう」

第1時 ① 温められた空気の体積は大きくなることを確認する。

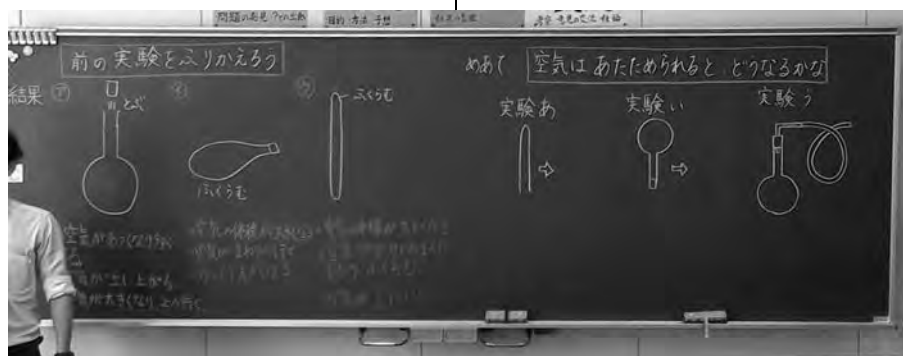
② 温められた空気の膨張の様子を図などを用いて確認し、学習したことを想起する。

③ 温められた空気が上昇し対流が起きたときの様子を図で提示し、②との違いを説明する。

<本時（2／7時）>

	学習活動	支援・評価
導 入	○前時の実験結果を発表する ・フラスコの栓が飛んだ ・プラスチック容器が膨らんだ ・試験管の口の石けん膜が膨らんだ <b>空気はあたためられると、どうなるのかな</b>	・前時に使った実験道具を見せながら、実験の結果を思い出させる ・挙手して発表させる
展 開	○なぜそのような結果になったのか考える ・空気のかさが大きくなったから ・空気が温められて、上に移動したから ○考えたことをもとに、温められた空気はど	・空気の様子を図で表し、説明に用いさせる ・他の人の発表と自分の考えの違いや共通点に気づかせる

	<p>う変化するのか確かめる</p> <p>①試験管の口に石けん膜をつけ、口を下向きや横向きにして温める</p> <p>②栓をしたフラスコを下向きや横向きにして温める</p> <p>③フラスコに管を付けて、管の中に入れておいたゼリーの動きを観察する</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・試験管の口がどちらに向いていても石けん膜が膨らむことを確認させる</li> <li>・フラスコの向きを変えても、栓が飛ぶことを確認させる</li> <li>・管の中のゼリーがどうなるかを予想させてから実験させる</li> </ul>
<p>ま と め</p>	<p>○閉じ込めた空気を温めると膨らみ、かさが大きくなることを確認する</p>	<p>◇実験の結果から、空気は温められると体積が大きくなることを指摘することができる【知識・理解】</p>



(4) 成果と課題

第1次第2時の「なぜそのような結果になったのか考える」活動の中で、「空気のかさが大きくなったから」という意見が多かったが、「空気が温められて、上に移動したから」という意見をもっている児童も全体の3分の1程度見られた。

自分の考えを言葉や図で説明する活動を通して、「空気が温められて、上に移動したから」という意見をもった児童の多くは、単に空気が上昇すると考えていたのではなく、温度の上昇によって空気の膨張

が起こり、増加した体積分の空気が容器の口から押し出されることを、「空気が上に移動した」と表現していることが分かった。さらに、フラスコの口を下に向けて温めたときの結果を予想したとき、下に向けた口から空気が押し出されることを予想することができた。

これらのことから、誤答分析では選択肢**4**を選んだ誤答は、温められた空気は上に移動するという知識をそのまま当てはめたものであろうと考えたが、児童が自分の思考を言語表現と適切に結びつけることができなかった誤答の割合も相当数あったのではないかと考えられた。

この状況を踏まえて、第1次第3時では、再度、容器内の温めた空気の様子を図示し、自分の考えを言葉で説明する活動を行った。（写真1）この活動を通して、児童の思考を適切な言語表現へと結びつけることができた

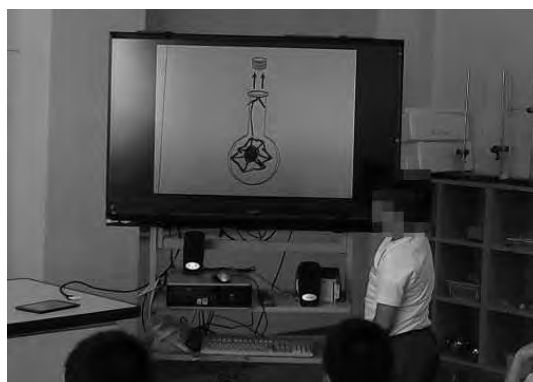


写真1 自分の考えを説明する活動

以下に事後アンケートの結果を示した。

表1 事後アンケート結果

① フラスコやケチャップの入れ物、試験管とシャボン玉などいろいろなものを使って実験したことで、学習した内容がよくわかりましたか。			
よくわかった	58.3%	だいたいわかった	41.7%
あまりわからなかった	0.0%	わからなかった	0.0%
② 実験の結果について話し合ったことは、あたためたときの空気の様子を考えるのに役立ちましたか。			
役立った	41.7%	少し役立った	50.0%
あまり役立たなかった	8.3%	役立たなかった	0.0%
③ 「空気をあたためると体積が大きくなる」と確信したのは、学習の中でいつですか。			
いろいろなものを使って実験をした時(第1次第1時)	25.0%		
実験の結果で、ぎもんに思ったことや考えたことを話し合った時	8.3%		
たしかめの実験をした時(容器の口の向きを変える、ゼリーの移動)	41.7%		
空気をあたためたり、ひやしたりして、体積の変わり方を調べた時	25.0%		

ほとんどの児童が、実験を行うことや結果について話し合う活動が、思考することや学習内容の理解に役立ったと考えていることが分かった。

また、1つの実験では、温められた空気の変化に確信ができなかった児童も、違う実験を行ったり、空気の変化を図示したりするなどの活動を通して、理解できた児童の割合が段階的に増えていくことが分かった。特に、実験結果を話し合った後、さらに自分たちの考えを検証する活動を行うことが大きく効果があると言える。

以上のことより、本実践で明らかになった成果は次のとおりである。

- ・容器内の空気を温め膨張させる実験では、容器の口の方向を上に向けるだけでなく、横や下に向ける実験を必ず行い、実験結果の予想と、班での意見交換・話し合いを行い、その際、空気の様子を図で表す活動を取り入れることが有効である。
- ・1つの活動だけでは理解できない児童においても、事象の確認、図示、説明、確認の実験と段階を踏

む学習活動を積み重ねていくことで徐々に理解を深めることができた。

- ・自分の考えを表現する学習活動を通して、誤答分析からは読み取れなかった、児童の思考が適切に言語表現に結びつけられないという新たな課題を把握することができた。またそれに対応し、検証実験後に表現活動を再度行うという授業の工夫・改善を行うことができた。

また、今後の課題としては、以下の点が挙げられる。

- ・日常生活等で体験的に獲得した「温められた空気は上昇する」という知識は、児童の中で強く印象付けられており、対流を学習する前の段階でも、提示された事象と結びつけて考える傾向が強かった。今回は実践できなかったが、第2次「物のせいしつとすがたについてまとめよう」での学習において、それまでの学習の整理にとどまらず、それまで行った実験を再度行い、現象の理由を考えさせる場を設定することも効果的であると考えられる。

## 2 今求められる学力観を踏まえ、実態に合わせた創意工夫が見られた実践例 ～中学校国語～

### (1) 課題が見られた問題とその分析

**課題が見られた問題** B二(三)

「月と古典文学」について調べたことを発表する際に提示する資料を選択し、その理由を記述する(伝えたい事実や事柄について、自分の考えや気持ちを根拠を明確にして書く力をみる【書くこと】)

The diagram illustrates a classroom activity for a Japanese language lesson. At the center is a grid for student responses, with a title '月と故郷' (Moon and Hometown). To the left, there are three columns of reference materials labeled A, B, and C. Material A includes a text about the moon and a table of moon phases. Material B includes a text about the moon and a poem. Material C includes a text about the moon and a poem. To the right, there are four numbered boxes (1, 2, 3, 4) showing student work examples. Box 1 shows a student's response using material A. Box 2 shows a student's response using material B. Box 3 shows a student's response using material C. Box 4 shows a student's response using material C. The diagram also includes a large text box on the right with a question and instructions, and a smaller text box at the bottom left with a question and instructions.

### 結果及び誤答分析

正答率は44.7%と5割を下回り、多くの生徒は1と3の間に提示する資料としてふさわしい理由を書けなかった。また、「理由」と「選んだ資料の内容」が整合しない解答も目立った。

伝えたい事実や事柄について、自分の考えや気持ちを根拠を明確にして書くことに課題が見られる。

### (2) 授業改善に向けて

「伝えたい事実や事柄について、自分の考えや気持ちを根拠を明確にして書くこと」は1学年の指導事項だが、習得が難しい経年の課題であり、繰り返し学習の機会を与えることが必要である。そこで、本指導例では、枕草子を教材として、今後も一層重視される古典学習の中で「書く」言語活動を設定し、2学年ア伝統的な言語文化に関する事項(イ)「古典に表れたものの見方や考え方に触れ、登場人物や作者の思いなどを想像すること」と合わせて指導していく。

鑑賞文と批評文の要素を持つ簡単な文章を書くことで、1学年の復習および3学年の学習につながるようにする。

(3) 実践

**提案した指導事例** 「古典作品を読み、筆者の人物像を想像して書く活動」

<学 年> 中学校2年生

<教 材> 枕草子（光村図書2年 4時間配当）（東京書籍2年 4時間配当）  
枕草子に関する資料（様々なレベルの現代語訳や漫画なども含む）

**実践記録** 研究協力校 中学校2年 2クラス（32名・33名）

<指導の全体像>

- 第1次（1時間） ①「枕草子」について、小学校での学習状況の確認  
②「人物像に迫る」という課題をつかむ  
③ 音読
- 第2次（2時間） ① 第一段の音読・合わせ読み  
② 筆者が四季のそれぞれの風物に対してどのような感想をのべているか、季節ごとに書き出して整理し、筆者の季節に対する感じ方を読み取る
- ※2次は1時間で計画していたが、生徒の学習状況に合わせて1時間増やした。
- 第3次（2時間） ① 他の章段も読み、根拠を挙げながら清少納言の人物像を記述する。  
② 各自が書いた文章を読み合い、意見を交流する。  
③ 交流で得た気づきや新たな考えをもとに文章を推敲する。

※今回取り上げた章段・・・「すさまじきもの」「心ときめきするもの」「うつくしきもの」「人ばへするもの」「風は」「ありがたきもの」

※今回使用した資料

- ・「ビギナーズクラシックス 枕草子」角川書店編 2012年21版発行
- ・橋本治「桃尻語訳 枕草子」（上中下）河出書房新社 2009年7刷発行
- ・「くもんのまんが古典文学館 枕草子」くもん出版 2014年第21刷発行
- ・小迎祐美子「本日もいとをかし!!枕草子」メディアファクトリー 2014年発行

<本時（5／5時）>

	学習活動	指導上の留意点、支援
導 入	○課題の確認	
	清少納言ってどんな人？－人物像に迫ろう－	
	○前時に考えた人物像を出し合う	○数名を指名し、多様な捉え方があること

展  
開

を共有できるようにする

○友達の意見も参考にしながら、自分が捉えた清少納言の人物像を文章化する

○書き方のポイントや文章の「型」を示したワークシートを配布する



清少納言ってどんな人？ー人物像に迫ろうー

「まとめ方」

例1, 例2を参考に、清少納言の人物像をまとめよう。

① 根拠を明かにする  
成す「なぜ」そう考えたか、根拠を示そう。

② 根拠は二つ以上の  
章段から探すこと

③ 引用する時は  
古文で書くこと

例 第一段の「白き灰がちになりてわろし」と云々あることから、

④ 二百字程度で  
まとめよう

例1, 例2はあくまで参考です。この通りではなくともOKです

例1  
私は、清少納言は「な人であったと想像する理由は〇である。まず、第〇段の「奥面で」と言っている。これは、「この意味である。」「この、彼女の「な考え方が表れている。」「次に、第〇段で、「このことを」と述べている。「つまり、と述べている。」「彼女が「というものの見方をしている」ことがわかる。」「また、第〇段では、「という意味で、おそらく「な人ではないだろうか。」「以上のことから、清少納言は「な人であったと私は考える。」

例2  
清少納言は「でありながら「な人であったにちがいない。根拠を〇〇あげよう。まず、第〇段の「な奥面で、」からではないか。」「そして、それは、「この奥面を」と述べている。「次に、第〇段で、「このことを」と述べている。「このことである。」「このことから、彼女が「の「なを述べている。」「また、第〇段では、「の「を述べているが、「の中で、「の「を述べている。」「以上のことから、清少納言は「である一方、実は「な人でもあったのではないかと推測できる。」



○グループで各自の文章を読み合い、意見を交流する

○他者の人物像を読んで、納得したり、自分の考えが変化したりしたことを書くように伝える



○交流で得た気づきや新たな考えを反映させ、自分の文章を推敲する

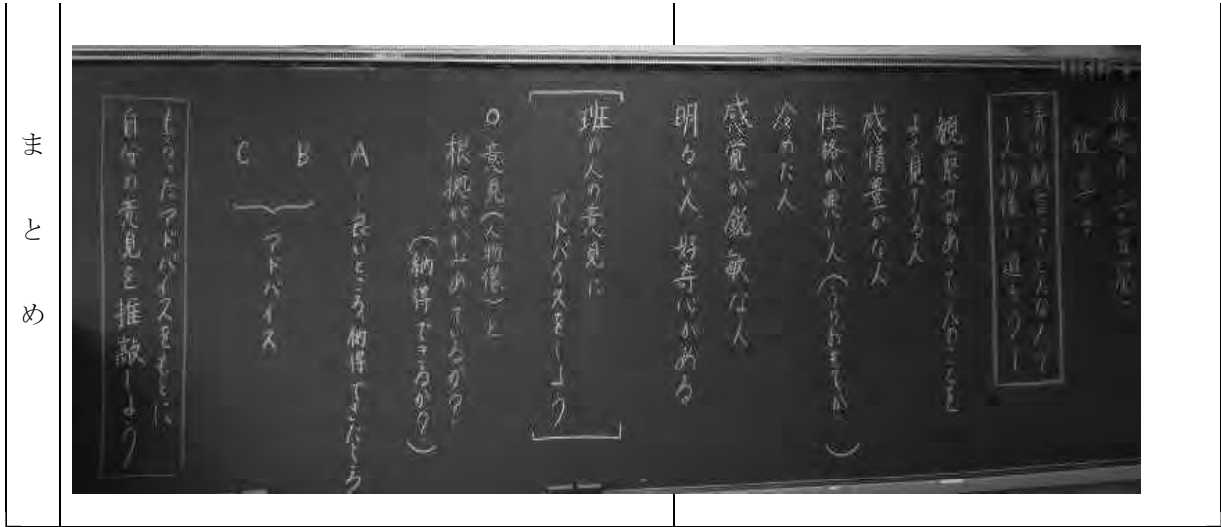
まとめ

少納言ってどんな人？  
二年（組）

清少納言は小悪魔的な一面もあるが、素直で感情豊かな人だったと想像する。そう考えた根拠を大きく二つあげる。

まず、第二六一段の「憎まざるの、あしき目見るも、罪や得らむと思ひながら、またうれし。という文や、我ほなど思ひてしたり顔なる人、ばかり得たる」といった文から、小悪魔的な一面をもったいたと考える。

しかし、第一四六段「うつくしきもの、イの彼女のものの見方はとても素直で美しいと感じる。何気ない日常生活での小さな出来事も、彼女にとって、は、うつくしきもの、なるのだ。また、一四七段の「人ばへするものも同様に、素直に感じたことを述べている。さらに第二六一段の「思ふ人の上は、我が身よりもまさりて、うれし」というのも素直な感情であり、とても共感できるのではないかと、以上の二点から、清少納言は、小悪魔的な一面をもつが、素直で美しいものの方が、まさる綺麗な心の持ち主だったと推測する。



(4) 成果と課題

[成果] 今求められる学習の在り方 ～意欲・学び合い・汎用性～

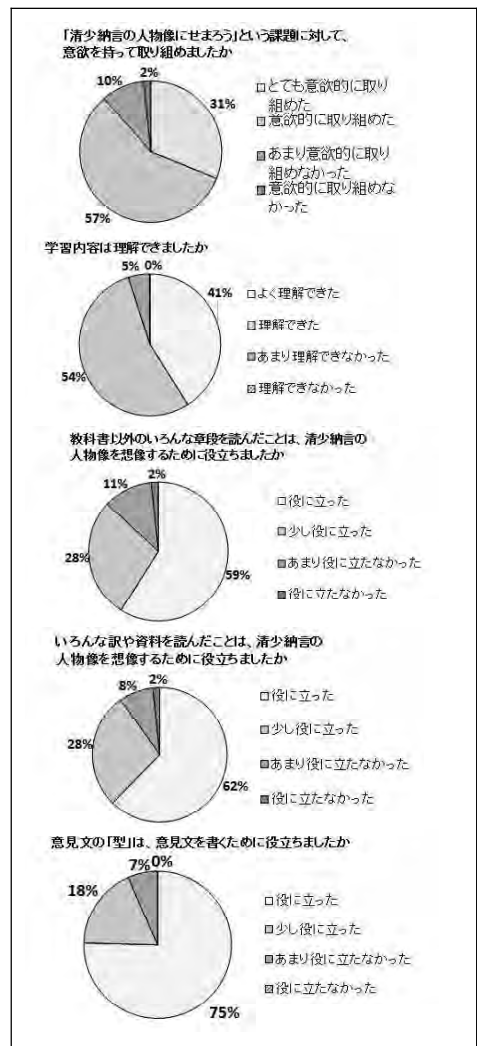
筆者の人物像を想像するという課題に対しては、生徒たちは概ね意欲的に学習に取り組んでいた。意欲を持って取り組めたかという事後アンケートに対して、約9割の生徒が肯定的な回答をしている。とかく意欲を引き出しにくかった古典学習、さらに苦手意識を持つ生徒が多い「書く」活動において、「古典のおもしろさが分かった」「たのしかった。またやりたい」という感想が多数見られたことは非常に大きな成果といえる。また、他者との学び合いにおいて新たな発見や共感と共に思考や理解が深まったこと、次の学習や他の教科にも生かしたいという更なる学びへとつながる汎用的な学習となったことにも注目したい。

このような「生徒の意欲を生かした能動的学習」、「学び合いから新しい発見・発想に気づく」「汎用性のある学習」は、中教審答申でも推奨されているアクティブラーニングの理念と重なる。加速度的に変化する社会を生きていく子どもたちに必要な力とは何か、その力をどのように育てるかを追究していくことは、教科を問わず教育に携わる者にとっての重要な課題である。

[成果を生んだ要因] 生徒の実態を捉えて教材を生かす  
今回提案した指導事例の主なポイントは、以下の4点である。

- ① 課題設定・・・自分で章段を選び自分で追究することで、生徒の主体性が生かされる。
- ② 複数の資料・・・いろいろな訳し方やとらえ方があることを知るにより、「古典は訳や文法を暗記するもの」という考え方をから脱することができる。
- ③ 学び合い・・・他の人の感じ方やとらえ方にふれることで、自分の考えが深まる。

資料1 事後アンケート結果



- ④ 文章の型・・・型を与えることで書くことへの抵抗感が軽減され、作文が苦手な生徒でもある程度の文章が書ける。

授業者が、これらの趣旨を十分に理解した上で、生徒の実態と照らしながら指導計画や教材を工夫したことが成果を生んだ大きな要因であろう。例えば、上記②に関して、文章の「型」と合わせて、書くときのポイントを示したワークシートを使用したことで、逐一説明したり確認したりしなくても生徒達は自分のペースで方向性を誤ることなく書く活動に取り組んでいた。与える資料や取り上げる章段も、実態に合わせて吟味されており、ねらいに沿って無理なく学習を進めることができた。

[課題とこれからの方向性]

課題としては、授業者が述べていることに加えて、わずかではあるが「どんなふうにも訳してもよい」と勘違いしてしまう生徒や、自分で深く考えようとせずに友達の文章を写してしまう生徒が見られたことが挙げられる。自分の見方や感じ方を大切にしつつも、根拠となる部分を的確に捉え、客観性のある主張をさせるための手立てを工夫していくことが必要である。

また、「授業は生き物である」と言われるように、生徒の実態や教師の思いなどが複雑に関係し合って有機的につくられていくものである。目の前の子どもたちのディネスや学びを見取り、学習の系統性を意識しながら教材を生かす工夫を重ねていかなければならない。よって、今後提案する指導事例においても、それぞれのクラスや生徒の実態に応じて教師が工夫やアイデアを盛り込めるようなものにしていく必要がある。

**資料2 生徒の感想より**

- ・この授業を通して、古典をもっと読みたくなりました。最初は古典と聞いて嫌だなあと思っていたけれど、「古典っておもしろいんだ！」と分かり、楽しかったです。清少納言の人物像も分かったので、とてもいい学習になりました。
- ・自由な活動で章段を読み自分の考えを書くというのはとてもおもしろく、楽しかったので、また他の古文でもやってもらいたい。
- ・古典の授業を班でやることはあまりなかったので、こういう機会に他の人の考え方や意見を知ることができて良かったです。
- ・枕草子という一つの作品からいくつもの訳ができるところがおもしろいと思った。人それぞれこんなにも人物像の想像が違ってくるのかとおもしろかった。
- ・教科書以外の章段を読んだことで、清少納言の人物像ができあがっていくのが楽しくて、とても意欲的に取り組みました。だから、もっと自分でいろいろな資料を読んだり集めたりしたかったです。
- ・最後に200字程度の文章を書くのが楽しかった。また、古文だけでは何となくしか分からないけれど、訳があったらこんなことまでできるんだと自信が持てたのでよかったです。
- ・資料をもとに人物像を想像するという活動はとても楽しく、その時代のことなどにも興味を持ってました。苦手な社会の授業にも生かしていきたいです。

**資料3 授業者の感想より**

今までの古文の授業は、古典文法や歴史的な知識等に関する解説が多く、生徒は受け身になりがちだった。「古文の世界に触れて自分の考えを持つ」という活動を行うことができていなかった。今回の実践に取り組んでみて、成果を感じたことは以下の3点である。

まず、古文を意欲的に読むということができたと思う。今回の実践では、どの生徒も「自分たちで読む」という課題に積極的に取り組んでいた。それは、「人物像に迫るために読む」という目的意識がしっかりとあったことが良かったのだと思う。興味を持ちやすい資料があったことも要因かもしれないが、読む目的がはっきりしていたため、長めの章段でも飽きずに読み進められていたようである。

また、「書く」ことに苦手意識を持つ多くの生徒を含め、全員が「書く」という作業に取り組むことができた。提示した文章の「型」をうまく活用して、どの生徒もスムーズに書き進められていた。自分なりに考えた意見がしっかりとあることで、自信を持って臨めたことも良かったと思う。

3点目は、生徒同士で学びあう姿が見られたことである。自然とお互いの意見を聞き合いながら考えを深めていた。書き上がった作文を班員同士で読み合い、評価・アドバイスしあった際にも、共感や新たな気づきがあり、充実した意見交流になった。

ただ、課題も見られた。評価の観点として「意見と根拠に整合性があるか、納得できるか」というものを与えた。さらに、もし他の根拠を用いた方が良いのであればそれをアドバイスとして伝えるように指示したが、なかなかそこまで他者の作文を評価できる生徒は少なかったように思う。「自分の考えの根拠となる部分を探す」という課題の時間を多く取り、もっとしっかりと本文を読み込む時間を取ると、アドバイスの質も変わったかもしれない。

この実践を通して、「古文を意欲的に読む」「自分の考えを持つ」「自分の考えを筋道を立てて書く」ということに関して、普段の授業よりも深く学ぶ生徒の姿が見られた。ただ、「筋道を立てて書く」という課題に関しては、文章の型が無くても抵抗感無く「書く」ようになるにはどうすればよいのか、という課題も残る。課題をふまえながら、このような授業展開や仕掛けを今後も継続していくことが大切だと感じた。

### Ⅲ まとめ

実践後、ある程度の期間をおき、課題となった問題に関して再調査を行ったが、正答率が大幅に向上しているものも多く見られたことから、SASA2013における実践事例について一定の有効性が認められたといえる。また実践終了後の児童・生徒の感想のなかには、「関心・意欲を高めて授業に取り組むことができた。」「授業において達成感、満足感を感じることができた。」「大切なところがよく分かった。」などの肯定的な回答が多く見られた。授業者からも、「指導のねらいをはっきり意識することができた。」「児童・生徒の抱えている課題についての認識を深めることができた。」「指導のポイントがよく分かった。」という声が聞かれた。冒頭で述べた学力向上に向けた検証・改善サイクルの構築、また授業改善、教師の力量向上に関して寄与することができたのではないかと考える。

今回、課題を克服するための指導事例について一定の有効性が認められたことを受け、今まで以上に指導事例の活用を促す発信を行っていく必要があると考える。教育研究所で行っている研修の中に盛り込んでいくこともその具体的方策の一つとなるのではないかと考える。

しかしながら、現状の指導事例は全ての学校で、全ての授業者がそのまま活用できる万能のものではない。今回の実践検証においても、児童・生徒の実態、また授業者の指導観、授業観に合わせて、提示した実践内容を変更しながら行ったものが多かった。課題を克服するための指導のポイント、授業改善を促すヒントやアイデアが明確に示され、かつ授業者が児童・生徒の実態に合わせてアレンジしやすいような提案にするべく報告書および指導事例の内容等、検討していくべきであると考え。

#### 《参考文献》

- 文部科学省(2008)『中学校学習指導要領解説 国語編』株式会社東洋館出版社
- 中央教育審議会(2014)「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について (答申)」
- 福井県教育委員会(2014)「SASA2013(第62次福井県学力調査)報告書(教科別指導事例集)」